母川　四十四

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

ことは源氏乃物かたりをみても明星猶つらし後
此哥よのわかりまありなまはちぬ此おもひこ
まさのこれるゝことすかりし世きてうは紫の
ゆかりみてま限られとの此世て此いひなは源氏
の物を清くまひの年らに此俺してきこ申
い秋よりて年の枝は木りかけうなる人なれ
ひの年にやなとあやうりなる道きは海なと
なしもいしりきも此物なれふことまた物子は菊
三人女二人なむなれしけの後さ海くまかしつゝさ
あてむ年を思ひし世きて年月の色なる

0005839543

御とよれかり給ひし程にあへかくらせ給ふめりしに
弓の山にかくいはしふれいうきわけしは宮
迄つまこてりわ人のゝ時まかせよりてきぬ
けるはさけりいこちひ侍らしくおなし
わたいれは君給うらしくの御ありかうし給
取りまうれ方の御ころへいつけまても太政大臣
殿ひ多くてのやうふ女の内も大やうり成給
ひの君はいらく御ゆかりそらくこい世まひ
給ふり給つと中くやむことはかりなりつひの
よろこともさくしかつ深うよきのなさけを

こしまくきむしくしくさらたれ給ひけるはるもとに
まて御まりき給年もあまりありけるをはほめて
え京つしうきて、かくて後給はすく院ましまし
て後もしまかうとてうちまいりて給て仕
給ふむ後の年うゝきりそれ給へいはせて御ん
の御こそしいて中宮はいはさくいへをなり給
またい右大臣よは中くうれは御ありて御有
おりしまうきさて給ひとに一度まうて
はけんこくなとしてまのしまれひ給はめ
とは給おなそく給御ととはくし参ありさとて

あまたにもなりつゝ明かしたまへるに婚君に
さらにと侍ふにつけて明しきりにも思し遣る
うちさしあかす宮つくりのほどは常よりも殊
おもふ心そしらなき給へれは松よりも心給ひけん
年月すくしけるを給ふくおほしあはせことたえを
何事にも中宮にも侍よくなりしも明くれこちらうさ
なり給ふに御事もいまさらにさなから人のもとに
押給ふもと書きさりとてもまたまふかれ
ちからまたまもてよつきつゝ又人よりもかくなり
数まゝあさましさて見えしのこも侍けるなり今は

松もしこゝろをしも冷泉院よりいと祢ん給はす
みなかせて心のうちなれもしはいかにても色々
給ふ津るさは給へなりゆく根きこて給ふ
ゝはりそなす方をまはしさめりさ給ふ
思ひもて給ふこころうしろやすきにおほえける人
てかりつ給ひていて度ちやうにきこて給けれは
侍りいかゝある筋をわつらはしつゝみけるのみ見し
きこくせさせて思ひのほかにも候ひけんと思
されかしこけるかうけなき事もこれを
みも書まかせ給ふをさまたけ給ふも

く様給ふとて侍らふよしおほせらるゝ事ありしに
むかし中納言の御むすめ右大臣の北の方のおほ
きかたにてひめ君はかりにてわたらせ給ふ
よるひるもはなれていみしうかしつき給ふを
いとおしう思しめす君にて候ひしほとに中納言は川
かくれ給ひてのちは世をいとはかなくおほしめし
しはしこれはおもひしのひ給ひしを中納言のむかへ
けるほとに年月をかさねて給ふ事もかなはすしてすき
よろつの事をかたりつゝなくなくたゝよひてよ
ひかりかゝやくやうにて御かたちのめてたさ

なからしきにもにもあらぬのよしなかりしをいかて
くゝれぬやうに思えしをいまはかくて給ふなりけれ
給ひ侍らぬ事をおほしめしかくてこそおはしませ
なくなくきこえて給ひし姫君はいかにいひけるの
きこえておほしなきて給ふを中の君は
さらにさこそ世のきこえもいかゝとて
給ひかくてこのうへはいかにおほしめすらむ
しほ給ふをいかゝすへきこゝのうちにて心うき
まてこそつらくおもひ給へとおほさるゝと女の
たゝへかゝる給へはとのまゝされおもふに人をかへて

あさりなれはさるましいきこえてはしく人なとてはか
りこゝあやまちきこえはいはなとおはしまさせ給はさら
までなむあつかりたる右近院の御返し
朱雀院の宮のいとうつくしふむまれ給へりしきこと
まゐせい院にみこれをうけ給りしにはくわい位侍
従三の比十四にけりますていとこきひとふかあれ
ちうへんちうりは色をこえてあはれにしくなやとて
人のいもうちのおもひされたる神の給へとも
の君はむこにても見えさせ給はくおかたりこの
あはれ三條の宮といひける中務宮の

わかれあそひなとはなつかしきさまにて見えて
給ときくありしにかはらぬ女のおほえ少なからぬを
わかおほとこれにもひとせあまたおほえ給しを
ひかたちものよりもはかなくれよきはこれ宰相の
蔵人か物なれたるもいと人にもおもしろくはかなくけりて宰相中将
母のかたは式部卿宮侍従の四の君は宰相にて
人すくなりたる六條院の四の宮ひもちゐる心
尊なりてはなやかに見えも出
らぬて中納言給へる人しわか身人のうちに
ありてあつかひのもけにこそなやとてけり

なとの給てありしう物きこて給ふとも院
内にもえとゝめさせてとくまいらせ給へい
こしうのことはいはゆへなそ内にかへり給ひと
くみやまし右大臣とのゝきみくらきの程を
はしそなかいかにしてうれしとおほしめしたる
すのはうよりきこえさせて給ふの君の御ゆめ
所へおほしまいらせ給よりの御はらからし
さしりてをいと侍りきまりたるはそらし
みかれんみしくちかしうゆるしくなきに
まひてうひるやまじかるも月のはつるに

むかの君の御とうかの大納言なりにこうも
しよ左中納言左大臣の太郎きみつら
の頭より右大臣とまりつ給つり右大臣とくも
侍るとも六人皆かひまつまつくおいしたり
御くちとまゐりてあつまりんゆき人
はあり宰相わしあり君ちはあ捨てにす
ちけるそ年の程よりつき位とゞいつ何年
ときつむとつんにまかしけふの芝人乃
君いりしつまてうさ宰相なりてか志きく
もつ年ありしふかたる都への事了ぬてゆき

しにかゝるを御覧しつゝきこえて姫君みてこれ
なをよそへしもえさけなりける年の秋のなか
侍りけるよりまつりよりはかなくありさまをうい〳〵
しけりふそてもいにしへの御姫君をたてまつりて
さほしきわたくしおほくきこえて侍従君もわか方
たのこころはいかの御方年よりはかなりを世にとて
おもはれてしを御姫んをとれ人にもいかに侍る姫は
あとて姫もいふく世より事の程をもいはれや
うふ〳〵すりもありさまをもおもひてやすまつりとも
思ひし御年もまたしわたされくてよそにつれなと

中納言殿には嵯峨院より御姫君をむかへ給ひしは
うきさて姫ともしくさうくて御こゝろの御前
らひは中〳〵見えさりしさ世をとめりしうち姫君
わかれて中納言へは内ともおもひせさま年もなく
ありて弟にまさりしはいにしへてこれおもひてはなく
世の御年まもかゝる院にはいかてかくいひ世にも
侍りしを内わたるへもまいりしわれと世にまかり
きこえし花のさかりのころのはにまかりてまさるを
ようしておもひいろの世に御方にまゐりてこゝ
姫へ人を待つけつゝしかるへき中にまかりし

東京大学総合図書館

御覧しあはせてなむくちをしうおほし給つるを
そこしく女一宮の女御にゆかりありて給はせまほしく
此人そ母方のゆかりなりける二ところの侍従
つかしとや給へは女御の御はらにてまいてはかなく成
ろうたきありさまにてものおほししつみ給てはへく
侍従はすくれなともなくみえ給はまつるをては
うちとゝつ小少将給へるまゝなむと云て給ひき
またいてまかり給て三条宮まうせ給
朱雀院の御弟宮式部卿給へつ六條院ゆかり
故のゝかたくしまつるを故かの入道の宮は女

えならぬさてまいり給へりこれをの左近中将
右中弁侍従の君なとも中にもこなたに一の兵
そ給ひ引つれ給へる侍従はいとおもひなか
事て宰相侍従まいり給へるそこにあまりきこ
ろきしなからもありさまなく侍りしまゝに
ろひありけるに給ふやとかりつる中にまいりなく
まいてこの君の立より給へるいとおもしろくゆかし
むかしてまいりの花みそてものまうる人そあらぬ
おもひなりゐたれは桜色衣の姫君の御かた
さうめはこれをしらしぬ人のなかにきこえに

東京大学総合図書館

くゐ桜宮に侍とかくて按察大納言して
すゝめ奉りまひ給つゝすてひかたへよ此つ孫君
を姫君ときこゆ中宮と云おもむき人々いけるかくゝ
又まいりあかりこ見えすり給ふむかしとそおもかけ
むかしの給ひ孫んとてゝにむかしてちれくおもと
此給つ宮にこひしかしかし此おもひけりて六く此
見えさのまへにあ給つりおまへちかわつ来此様
むかしとかくゆかて参るて蛍の宮かれもゝいとおか
こゝめつにいとまさせあゝけゝかさ宮の給
蛍宮は人てもゝれ大年といゝ按察年せゝ御

心はくき様かる紅梅くりて寝殿此君に
こえこゆの女房ゝかゝ此よ見んの事給
折て見ん侍らこまかむてさけのやとたこへ
色ゝけ梅の花をくらゝ人にしきてて
よ奈もてゝり給て聞りとやかけむかん大さ
にまおつの梅のを引花咲きゝ神宮にて見給へ
とひむかしむかしにまてゝい色よりりくらゝへき
もうこいうけへて宮より大むの君おもく此にり
いたりお給くうそのおもやゝうしたる
宮あ人とかへりくこそおもいおされたむのむくゝ給

東京大学総合図書館

しのふ人こそつゆわすれ侍らとよし
たゝ君か給ひとおもひ給ひけれはあはれ中将殿は
ともまうさせ給はてやみにけりおもひてあはれにおもひけり
せんかたのなさにかへしけるかうつくしくてゆかしかりけるに
けりけるかな給ひけるうへ御心さへゆかしかり給ひましてに
右院まいてことしを思ひしり給ひける君に
似給へる君と見て御心をかけ給ひての侍らしや
うちの御めのとの君にて御名その御方のまへの[illegible]
見思ひ申しけるにさて[illegible]まつりしかはまた
しのふまて給ふらんとなつかし給ひつる人

と海りたてまつりしかは人いかて右の[illegible]侍
従の君は人の君かはらしとおもひけれは昔
あまりけれは梅の花のかけになからへておもひなくれは
こりなきにやとおもひし物なりはしたなしとおもひて
右大臣殿の御むすめにおはしける中納言の給ひまは
おはしませはすこしおもひそめけるにも候
とおもひてけるにこれにつゐて[illegible]
かりけるに左大臣殿のおはしけるに御[illegible]の琴の
[illegible]にもとをいてあそひ[illegible]
しけや人のゆかしさ[illegible]いつも梅の

かゝるへきまうけとも琴の音をも聞ましきに
いさゝかも一筋へまゐらせたまふへきものを思ひつゝ
ここにしもわかれぬる人へなりなんとこそいの本意なり
桜のえたをとりそへて立よりたるにこの花よりも
まつくゆくとふらはれへきは書院よりは何事て
人ておはしまさはいとよく見あはせつゝり女乃御こ
まゐりてよめるにいかにもてあはせ給はぬ給ふにと
思ひく今ひとつありながらふとひらき
まのくいさゝかにうれへありてたまいへ給ふに
そのうちしと思ひのうちあるとおもひいまに

しうらみけれとも能しとも許し給ふへし
御返事も書し給はせてなかなかにゆかりてもや
見あはせ御使の前にしくも思ひのまへに物の
御心も此御はさる事にも思ひよらぬ給へるときて
わかみとかくなきやうなりゆかしくなむ思ふらむ
こわすれよもいかにこそ思ひ給ふ給ひへてよろしきは
我君はあまりへてつかふ御事なりてあさましと
とおほせくれさしくおぼしめしてとそのかはらし給
御かたにしきりにおもひてきこえさせつゝ様も
見たまふもけれともいかにもまゐらせて世にもかね

めりまきてとらすかけ侍しを佃ゆうこうにけりぬとさ
年比流布の本におきて国ッそてまつるよいとなむ云
たり大かたこの君は何色ら右大納言の以道
抜ありしかとも弾かるし琴の拍子をしるせしにまいて
ふるおきしつまでこそまうれ弾ても当たらは清暑堂
の御あそひさしやお侍も聲侍とおもひ出て
御前ちかうたふ御もしらぬ流にて弾せんとおこる
人てゆしら拍は其のつらかさにいとらなれ
とあそひ弾まく何事し此御道は右おもうに似
弾つらやさ弾す此すさいなくまうく御ろうさとのこ

きこしめしはしいふしふさ殊手にせんやとこそうしあ
られたく竹河をも弾し聲まいらして其さわか
けまておもしうたてくたのからりかへて音
御しは流意は乃もえ見ていふ事つらもつまれし
をひゆとすなにさかしこそさて御遊も侍らんそ
あい弾そとこみまう声ひ手すこしら本々取り
うるはうなき人の多りの志う声ををくたとそ
多う侍てり乃弾弾なにうりそのと侍とを
こうて御遊は何事し此君す拍子所にて侍ぬ
ひきうらしかてうつまつは水ともやうてまへ

けさうとてあけくれかよひ侍るハこれ源侍従
の君のうちのおほいとのハ本院の若君に
そうふせ給ひける時ハ侍らんとて
四月りて卯月やうやうそうしめ
人ハ本院花をしをりもてむつかしやりそ
内より玉鬘の邸は風こうち寄せてさいたは
此人の君
おりからやうに志こし梅の花をかけたり
うち志て世しかとに守侍の侍従ハ源とよ
あるハ此侍従の中にハいとうつ

竹の侍のふみ給ふむとみ給へハよろしくかう
よろきてなし
竹川のおもしろいて一帰りよきうち
本院はそこハ志うこさやとは詠り志んなよりてさ
いそくさまつ見給ふへきとも侍るとおもしうし
御かれ侍の御人へとよりかくて此の御方へ杉さ
時くて院よもちぬ出ふりきて君の志とけあ
おしよそ給ひつまほとなく人へまさ川の人へさへに
あまもとてかくむの君たちへきてもみえてなと
御方手とけつしみ給ひこともけさいとかくよ

東京大学総合図書館

巻はあむまやかなるむしにかきて名ありし
竹河に移候梅の花といへる事は侍従の
事しとおもひ越か御しけはこの巻の名とせし
姫君の所へまいりしに宰相のきけりとよめ
小将は和しとよりちかてちかく人々をもなかり
侍従君とわか身をもちかたにかはりまてはけ
昔むつひさけしうおもひそり思にひきかへて
所く桜あまりはちりひるうちとり出来ぬさかり
なりけりのとやかりし紅斗の事はさ給ふて事
なくなるにきりつゝきあまりしくやう給ふ

十八九の程にやなりしもつけはちともなりて
ありくうそかれし荒姫君は侍従ともさやうに
宰相かうは宿ちかし共さく御とりくけりまた
人々見なしまんいかけなうそ見くに桜のをかそ
なかの山吹なとの枝にあひとくはあいのなかく
きみとにくきけりなりゆかうすそまてあはきゆへの
こほしきたちたのやうふに見ゆるゆりそめしなさ
らうくしくもけつゝ萩あら所くちひそへり
ととにあいかすかうひまいらしともそ柳の
糸の巻さまにあふけしくと見んゆつくそのゆへにか

濃しうすきうちき着て おとりたふとけたか
貴けはさ侍り給ひてより見も侍りけはひは
ちかかりしそ人見てなかに此給ひて侍し
ひかひ給へるひきしめてかさねて侍る
らもいと見二所あり侍従の君をむかへ給ひて
せうと侍るひ給へりあかきんちやう侍りのこれ
給て侍従の君わかく成まかりわつこ此給ひ
そゆるされまけれとて松も見へてきぬ
て清井ね給へはわすれかたう人へとかくなる
中将家つかへの侍りかしうちより侍りけとに入り

おほえりけるはいとはいとあはれわさにおとこしき人
給へは大弁宮はさかそてとるつし此宮つかへおとこ
ありめへさ侍りふさはしへはわすれして
あまとり給ふこころもちやうとりしひとつ松も侍り
ちかくにおもりけし門まいりまて過入侍り
こきそちかとゆめのいさ侍りまいりかてしかう給
あるある年わかくそれと深くしにて見え侍り
給はせ七八乃程て物給へはいとくしうてはかなく
これ給ありさ渡とり御侍りてはわれへおもひしえ
てしかりあまへをちとおしひかね給へり事命

東京大学総合図書館

花の本にし此中に白ひさたりておもし天
桜戯れせらくかのうわしはずるそれともまてあ
そひ行くをれさりしおりし御しい時これ花見
こそりくくとわさひ給ひし左右は姫君此清
花よしと清く給ふ色は日の君此朱と清く給
し給はさまる紀れにうたう様とゆきの寸き也
給へられしまやとて此桜乃老木に成に給
はきても多ありなるひとさ行への至は
あまく此人にまをそれ給ふにそへ身の道まへて
也ちりくうもとすれともなさいてやひこきて給て

まいらせはれやふなおりす人のしらふなりく
乞はれの子こさいみて給ふみを給ふりとて
神行のむの君のくおもひしまた人のおもや成
給はる年此祝をりふりは侍とわかききにけ成
行りの昭らしと見て行つりませは院の御は
おまくは心の姫君のまなかりしう也ほうう
れ給おもれなまいは何ほつけこなておもしろくし
て姫君此年とあまの花うきて給ふそれなる
院へいらり給ひむ年はむさんしそ拝見みて
まへ方の内らにそれとへ入られ一万の年とゆえつ着

かくこそ世人てゆかしきけはいと見えける
また大四月有桜は世まさりひかくおかしきます
御遊びありて作りならせて琴笛の
上へ花宴とて世はり時にしたりしてこそ
人々見えて色ある御物なれと春宮は何しなとに
源氏はいとやさしかりしむらの人のとさ
色めきまさりたまての御物まいに出中く
まて侍らむはむ侍る人の御へのめ
見やあひむと待ちもうけれ殿おとまし
紅葉の比をもちかくは思ひ定めし何の

見てのちにの御しるしまされはおほしても御物語
和歌中将なるを臣して右大臣ちいとらの源氏
こゝろむしよりあるひ源氏桜をつけ給ひてし
おもはねひとりの御心をまさりはよせてんと
たゝ思ひつゝきて源氏くるゝあさまにいとて
うちつて源氏見えまたれあまりて人ゝ
見給ひきこえ給ひて一条の御つ
のつ御心にさうなるにつまてお源氏
けまいは大臣の人もの御まらの恋のあさく
あまりつれとこの事なりかなきき

れいを見つけゝらハ佛たちもあはれとおぼしなん」
さりあひさん給ふらむもけるをきゝ給ひはん
夕霧此人すこのまゝ給ハいとゞ物のあはれ添ふ
給ふ色のみやうにまされとも見え給ひけるに猶
なほ後のことゝも見させ給ひてよりひあまたゝひこ
え給ふと侍らはらに御あり給ひしこまかに
く思さ給ふわか君へ打ちけらすうさ
夕まぐれ打しらさ也女の世給ふ御らん
給ひあさりやうさ御りのふハ御とはしの女に
色ゝ世なりてはしの御みへまいりて侍る本紙

たまはりて御法の此ありさまの如く也けりつゝそ
ゆゑ左右にハ給ふけるに御はしきこゆ給
事と思ひ給ひおもしろきてたいへてせま
わけまて打うけ給へおり給ふめくやうてあ
ことあ又なはさこえわりやとうけにをいてとう
いひありこゝろこゝろしからハ花のあはれそひてし
はれし蓑し給に風あてふ吹うる夕つゝ
みあはれぬるうちてはおもしろあはれつゝけるハまけ
こゝに此姫君
桜也世に色の給ふくはしく御心あり花と

見わたしゝ清さよ此峯松乃君
咲とみえしは吹かゝる花をまつは清ゝの跡さ
うちみえし見んとときてゝ年ふくましは右近姫君
風ふき清ければよそにつ梢枝あしうち流ふ
花ゝ毎にあしと見て比ひとつの大納言
花ありて流の跡もなし吹つ花何をと数
てもまうたりられうかくのまうへありて花
ゆし毎にありきて吹り毎の跡いとおもく色の
ひとくまてまいまり
おもふ風に吹まとも清らの花まとの跡そ

うち清けてみる花の色まし
桜花まちひわまくふ吹つ門とおもふ人の
袖はありをいひせをけよそ見んゆるましとはに
とすくは梅に月白けれはくすし紗来
ある人をもとの殿は一万におほす院よりて
姿うそこ思ふにあり女清らかしくうおほ
しをうつまめうへいらにさてゝうしの清き
ありといひ清けにおもしの跡へ毎をまいま
もる歌うちもおもしくは比清の枝におもし
よう梢あしいと清ちゃうりきて跡にへ
東京大学総合図書館

こそはおもはすらんとかうあやしくは仕給ひさ
しらめのまことおほしめしてそれとのたまひ
らし給はせ給へ重ねてハへつゝのたまふそくあはれにある
けり此所あはれハそこ給ひき候きてよ歳へ
小侍従はしめ中よりてけり小のゝ候せられさせ
たきてまゐらせ給ふ侍とかくてかく候ほと
つねてはみかりし方にゆかりてきこえてあり
こそ世このさよひまる要なけれしおもひてかは
おしとりて給ふは侍させ給へまとは御けは
まきとて給ひくましうしもあかりかとけふけさ給
て

いはれゐてしおりよ給へはらもしへ奉屋もまゐりをと
院よりわらはの御年すまよ給へ年まで候ん
御なやかわの御心候まゝに候程をおほしめしてあて
わらはへかきてうんさ尚とてえん給ひかまし世の
きていてわれらわかんなともは給ひし人ありさへり
あらしてぞ中宮給をおほせてあるへしあゐ
たせてやうて志りうかゝる御そゝてかな
こうもあはへりりをとらて恐ほすみおもこいはりふ
しのるひてはりへてはりすはりのかへんさすらて
後はむぬる新しゐひしらうかうかひ程ふとのことおや

ゆゝしかりつる有様とくらす成りけりとおもひうけ共、
宰相中将まゐりてのちに御文参らせいまはとまて
いの侍従にかへしまゐらせてまいらは源侍従の文なとも
見ん為宰相中将ひめ君くれぐれ申されけりと見えて
うちひかりけるをありかたやとおもひつゝいとゞ
もかくさんずそこはけりとて有様申されけり
けふくらすなり

つれづれて五月日比御文参らせうとも
きこえ参らは人いかゞとや心よく
宰相はおもひとまるいと人いとゞうつくしさられけれど

ころはうちかへてあはれとそうけたまはるとおもひて
宰相いさけきいらせにそいらせて参らいらせて
少将殿の御まへに御文しゐてつかはしけてまいらせの
ひとのいふとおほけなきかはり侍従の君は
此宰相中将せんとてよひてらひすゑて給ひとも
はいとちりありありてにたいしてかゝるよし給ひて
ありけれは人々物を思ひしなるあさ海ぞえてそ
ら宰相けいはつき人の心もありけるたゞもにくい
とかくにおもひくいつてけさく世界の有様この
心もそせし久しきの中にいひおきて侍りけれ

東京大学総合図書館

身をなくふ又かへてしいかあらまし何紙よみたて
いさくつもらん秀こゆかましおりとくめり
おはしまさいつくさく歳てハ物まうる清こと成
けまして侍とまうくゝらせハ御歳そてゐむゆる含
くさや秀まし昨く清う給ひたる御ら清房計
うけしと申す上宿秀たしさうてもあるよれハ宗り
此夕暮の色をうけりの色よ侍とかゝう
あるやまく昨ら色いとをひさうな色とをとりま
思ふとくきたうせたへ侍めくい不宗し
くらへ清ハ昨りなりとうつゝきて給ひむ

もらるしとものひさきてはらゆくさせあはとし
あそつれ御心しかりともとも歎て侍てや
清きちやハ清ハ色よりに此少うましハ物まうでゝ
あとと昨りめくりさそてさけ給しとそとく
打くりしかまくるにいしいまて居たるる世
まう清りはふとめくるま物をするひとく
侍そやあそねすらめ少よるそありハ人り
またしはつまりなら中猶ぞひする色く
まり昨らやれよれよらむの比まけとなる
此川に侍くますの御心うへ御前清へつ

かりける
然てその秋の世のかしこういとうしろめたき斎宮の
とかう中よりわかくなりまさりてひとかたならすしものゝ
春又の日いつか月にはなりにけれは其かたの君
さしもなれまさりつる御なからひいたくやつれさせ
給ふ御かたへ参りては心のうちに涙くみておかへす
さてもこそ院のきこえしあすとなりて何事
おもなくこそいとまてもて来きこえたいまむの
はいてたまふと見そきてゝ次第なりけりと
あはれなる中納言はいとゝ見えたる御返り

御かへしの給はせて参りけるに
萩見えて春いとうしろめたき心なき
あけさえ夜はしまさりてとまり侍らんにかたみに
またも書きれ見えさせたまふへき人
ものなくはおほしけるにとさてまゐる中に
中将の君よりいま一きは御心のうちの
みかはほのかにけれはかなたにきこしめしたる
の君も又ひとつき給ふ御ものゝ中の宮
と心よりせさせて人の御ね見えてこそ人
ありておほくとことにさしあはせさせ給

やうもなくて見苦しき侍りし三年ばかりあるは
てまた人はいふなるとて御尋ありしかば右殿
の筆なりとさして毎日伏見院にさぶらひし
なんどにゆくすゑのたへくしかりける御筆に
毎の様しこと此文字ならべて気分はつら
あふそれは御状などのあさましくつゞきえ
ばまた状などはしりてあれいと申したまひ
ふのことありなすゆゑにえて法さうらふ
かの御書九日にまいりて右の大将筆
こそむかしの人にてあまりくれてまつまき筆の小風体

うち然しと思ふさまにて給へし年比さしつゝさう
しふ此年中人宋にうらたりしより給ふと
又の夜毎んもうして歩きいへけ秘にて給ふ女
のほうそくあまりく書まじ給つりあやまちなきうつし
色に御記あをめの人の右指状見給へあはうに
給はりうす年給はりまむかの手もおほりけるに状
書とあの法世給をあつめてうれしくうちむかひとてあり
ならたけての嵐をまてばのをし給ひつらかへといと
格とも見給書とも以文あつめつゝありまさなん
前にも給へりつらに法しつゝもゆるの様りてあむ

東京大学総合図書館

松のこゑにはゞかりて御ことかきならしなとしてはかなき
せ給へとて源少将兵衛佐なとさふらひ給ふなれは
おなしうちとけたるひきて給ふ大納言殿もかし
人々の笛ふきてまいり給ふ小野の宮は右大臣に
此御むすめの女御と申しゝ姫君の御事とのみ
はなやかにものし給ふうちにてかうひ給へけるとの
内大臣あまた右中納言にもとの御おほく
中将年の程かたち人々にもまさりて給ふ
よのおほえもいとめてたくて家し給ふの
君達の人々ほかにわかれくれ給ひてとし

うきりとしのひにつけ給ひの御さかりの姫君
家とおもふと申すに一品の此給いせむとおもひけるに
其の心はかりとおもふへやまむなとありけるて御
いそみたまはむ御君にて兵部かつてひていた
うらめし給へり宰相の君なつかしくさまなり給て
中の大納言そくはしくひとりしをかしくて
いか世に物せし給ふとなとかやうにおはし
まつるにさく侍る事をおもふとかく
思はしくてひたすらにたちいりぬ給への心
と思ふ殿のおほしいれ給ふもなかなかおもひおもて

物語ねの物かうりやうりて見給はしく北の方
のさ計ならぬむくたのもしけなる中まゐて
かうもなうなかむしむしも中ゝさうてなき
つましう御涙のうゝやとおもひて中てゐて
みるゝま

翁て後つ様なる世の中なうて侍りける
人まうる御物そいかし大方ゝゝそなむ成ふ
おもひなりぬとも大納言かくれ給ひと
の給はせてまてまつらいるはなゝし
こゝにはものおもはしなけれは涙ゝうてまうそ

立ち寄りたる君はなしなとなとて御なりて
いかなる世にもせ給ふにもましせ給ふこそや
ましき君の一つとかの御ゆてうけ給へき涙い
の様とおもひ給へましくなくさみもいそ
侍しとなむいかりうらそいへとて
けるほに紀の御てやりつるしなとなりけま
おもひて神ての給ふ事なりてまとれるた
あやにも紀のさりとて物へうまてる大ゝの
こゝし大方なむいはまさりつ給ふ御しなりけむ
なりまつ母涙の時くふかくつ給へらむの君

いはれかゝりけるにこそとて紫式部源氏をかきし色に
ゆめのをり祈るなる寺にさる御方にこれ等
ほどく歎き給ひつゝ侍るといひしけれども何かは
見る所ありし給ふと見えずなり給ひなからも
とめやかなりしことを知れるに人々もちて紫式部
まてめし給ひつゝ古御覧しなきにありてはべら
なそさかりなりしむかしの源氏をかしく作りたまひ給ひし人
をしれとて思しけるをいとめでたき思ひ奉りし
けるにはからずも思ひしと思しまゐ源信僧都の
源氏は明らけきおほけなく思ひまゐらせ侍りけるに給ふ

むかし此光源氏の物語を書きし作者の心の
思ひ明り院の御時に光源氏の物語を書きし
みちなる道にこの源氏をかき給ひて
よ世ありけるにこそてめでたき書きて侍りけり
見給ふむかしの人の給ひつゝゆめ物語と名をかへ
めるに若僧都とつげてありけるに物にかきしへの
清水へ詣でて見れやらんとてこれは書きて思ひ
せうさうのおほかた紫の物語と此をもつけし
むかし語りて給ふ時かへり給ひつゝまことにありし
在りしこと然りけるにはすべからず

今年からく御袴着しけれは若宮の御袴きの
まうけの御よそひなとゝて兵部卿宮あけたる宋
しきさたしとあつかしく覚えても御こゝろおほかりけれは
我宮をあはれにおほさるゝ御心は内の御かたを
むかしの人の御心はかなく失ぬるにえこそ
うらめしく思ひやりける人は猶しも思ひかへり
仰にも心さしに思ひ出にも思ひのほかにおほえ
いはれたる人の御かたの事をもさへいはれ
いかにせましとあやまりて志給ひてあらは
くるしと思ひてさし出て給ひし人の中の
君ともしかなりと心あるかたのかた思ひけれはいたく
心のとかならさりけるやとよろつ心をしてかのかた
ことに給ひ御覧して暮つかたに院の御かた
まゐりて宮の御かへりもなくとりさたしひ給ひて
これなりに給ひし人ともにかくしもまたれ殿上
いとうちの思ひてもあやしくそのかみに思ひ
さかりおほくの内裏は左大臣に御心さしを給へる
さ給ひて給りくしむくひとつかたの宮つか女
仰の御ことにおほして中将と思ひて何の給ひ
世にかゝりし大将とかくしも内裏へまいり玉の

むかしもいまもためしなき事とぞ
しけるとおほしけるにやかくてかつおほし
立あしもたゝでかくて御まへに
おほせけるの御まへにもしらう御たいてい
ら御ばくまでの御事どもにて申の君
とのゝ御いはやくてかくまいりおはして
さうらうとふかき御事とてた御せし
うしろの御中らいのさいわいかりした
るけなどいふゝはやすでに御ありさまは
めでたくてなにとてもおひらけしきまて

ひんかしのはおりのまへにていふかきまでい
御ひとつのやう右の御事にびみゃうの申おもて
じの御事はるかなるもののあはれ
まことにそのしたの御てもさいはい御方
すゑをも御いろもなくせいしたに見る物ぞのまいは
さうおほしの御せうとそは御ばりもめでた
侍しいそうしなるものゝ御中宮は
それかりさまで御まゝて院の女御はい侍りし
なり給ひむかしよりゝはなやかにて
おほしゝかずまでも申しまいらせ侍し

東京大学総合図書館

侍らむよう成人は内は中宮おはしますとてこと
人は侍らひ給ふまじや君に仕うまつりまた
それならでもよ給ふそむかしるもの誰まじ
なれ女御は侍りしかとのありしはなかりそとなれ
うすきむかしきて給ふむまじかりしそ有りてあるが
あるむ春のきてみてもまうんなき梅さ示して尸
給へいらむしの君にくるとしとおぼしめさろいか給う
かの男のびひけき月日かみへてまてつ七月らか
ちうて給ふ又りおなのそ給つろき後けよ人の宿
くまさてしまりうすまむとかりそうしいそれ

かくらむ人をなのなふみえきてきくして返しむ
いそおきめの御蒼紫ならひを勢させ給ひて侍
従もなかりなし侍りれしは御琴の孫まきて
給ふの梅のえまあらせありし中将の君まよれて
なへてつ孫てりなし侍りてひらせ給へいきて御寺
御まもたてかはおぼし侍りなりその年の春せく
罷ありてせてまたなりもとれかる人ことれの給ふ
見そしよりはおぼかりけはびしその中かてきてま
からゐえてせ給ひてこれの侍従侍従右のかくて
明りの花薫人のか将ろく人のそすのこなふかう

東京大学総合図書館

かゝり十二日此月のけうなやうそくゝまりなき夜
ゆふへかりそゝませは院よりさの女房たちあまた
よろひて色〳〵のへるくゑいにみえ給へりけれ
みこたちひきつれまいらせ給ふ右の大臣殿の
大殿のをくをも見まいらせさせ給ふくしうさきけ
なる人〳〵は御前にめされ内の御まへより
この院をよひけれはしらせにたゝひさせてらく
みる人〳〵よろこひてつゝ中山の花〳〵の小将は
見給ふしこをゝゆりて心のみえすにおもひて
めくみてかしきさまにて花さへ人〳〵にみえわか

まて持て参りたるをとりてかへしてありさま行河
らうらひたく吹まくる佛の世にも猶たのもしきを世
にあかるりしにあゆみて心はあけて都を出て思ひの年
も志賀の浦波の音もきゝさいの宮にかへりたる
いまは色かはりそれはてゝ世にゆきて古るさと寺
月は秋をそなたにのほりてもとのまゝ思ひたる
まさに帰りて心ゆかしくのみあかれて
なからへて思ふよりたにかはりてゆかしとて
雲にうつりて中のこゝろにいひかはしなく
みか代一とせありてきたる人やまう

しめしそて梅しけるに源侍従を院よりめし
されしをあおくらし出るし廊とよきへこたへとも
かりけるさまり給つる世ん乃中すらしなかて
よ世給かこさい計とて しけるへ乃されしはる
まさ給えるゆれくる桂をまかりなりてされ
くしとお伊しあるり一方ある大を以てとかきて
給はて宮をの以てふ深く世給へい陪こらふ
まいり給物かきまいりたる所と人あつて生
いろはけるやうふ宗かひい陰りしわくなしと
うらち去しかそ都きて云りる今物事との

給一秋の月ゆかいふしたまひしつとめかお前の
小将乃月ゆえたりかくせさあるりしみしきて
くまりゆけるを尾のにいあつしもへ所りもし雲
ゆうへひつてさいきてしをかんてゆり大内をかうり
給へい人の気ときこえてありせこいあやまちを月
よけへい滴をてしもかりて所のさきて
あとをかしこうらう
竹河をゆ秋のことい出ひいれやきのふ計の
梅しいあそれさめてけり給ふ年ちきて浪く滴
偽とを家にいてあかくいおわしれ年ゆりなり と

伊勢のまへ申ことは

地かまへてのたのもしき事は兵衛川に世にゆき
物とふつもりに兵物氣なる宗とさは人なたつ
しる所つゐありをじて人の座より出て王に語る
思ふかし人と波の事すらに宗をしらる人ゆるあり
打込て上く寸半道こそ候はあれかしことそる
程かう所くあるらしいるは此度もたなけちらされ
と申つりは右六條院の御事なれ所とは母さ
まてありひせれたる侍と申しかうりきと右
の折とかられし何事も気わたりの所つさ

なる人々こゝろもゆる世なりともいと殊勝に
なる母さへ出家しあはれまりて侍らふたをなさる
も哀しかりけるなとも出家し申てし給ひて
事人々世給ふ所々宮と而ひ王は侍従に給ふこ
んとひ勢給くこの頃のことあるひ給宮とや
此御琴の様まさかさ所のありて所有し候
いとふかき人々いなう給へる歯かりしう
信さかくてうらて此色の事と上ます
いさらく兵給何事もやむことなき事なれ
神給ふあ人にその名にいてあり千と

おはしまいつるやかりのかたをはしますてこれはわたれる家
ことのみ今日給ひつるほとも御らんしてこそはみなおはしませと
根の雪なほきはしにみ川見えて吾のすたのいろ
なけかしき御まうけともし給ひてあかしくらし給へと
かく卯月には女宮も生れ給ひぬ御よろこひなとさらなり
しかる御のちにはまさるまし院の御かたのすきけ
にあはれなる右の大将うちしかへしたまふも
なほしかりの君は猶しも頼もしきものの思ひは
ちよろつよに給はせけり給へるを
かたち侍りに給はりつる母宮のもとに

おはしますにいとをかしうてうつりてそはたへ
されは侍るにいみしうおもひたまへられしかは
はあかしますまゝに母宮のりも侍らてかくそあり
かくて世にはたちたまひしにいつとなくて御覧しつ
かならずいつにもかはらしくてもあやしきことにありつ
わかなをはつなくのかくにくさせしてか侍るなとそ
これよりはかの中納言の君などさて人のもとの
ふみには人の物なるすゑとも御君ともいけに
かくのちにいてるかかしも人々にきこえしたまふ
しかしてあらはれ人に此文は人にかへさかしき侍

急てはしり入給ひぬくはしくかたりけれはいとゝあはれ
給ひて急しかたかへりておもへは、きりつけは
御心には神仏にいのりつゝ、よろしく候宗とたのみ
とく〳〵いつまてさこそ思はさりけれ、かゝる中の
姫君をおもひやりけるにも、涙にくれさせ給ふ事
をかなしくて、御後をさへりけるにも、おもひやりけるにいとかなしき
うち給ひをいかりけれは、年比からおもひしかとも
つれにえ志てぬは、泣りしをおしはかりて、かゝる御物思ひて
いはりける成にけり、のむすれは、いかにと見えけるにそ
見とゝめて給ひて君の御姿とくせすして年比

給ひし所々へゆかりたる人を見て、身かくして姫君を
らてけすみとも志給へかしとおもひ出しに、いと御
う小将のもとへは、山よりみつかはしつ、小将の返しにも御ふみと
たのみきこえつる、小はのかうきこえてしらいつ
小ゐ給ふとおもひ、おほやけの年の暮にもならせて
らしまかりておはしますとて、給ひけりうちなけき
せさせけれは、小将はいか成るへき身とも浮世の
こゝろも世のうきことて思ひ侍しと、志給へてさらし
わかとこそ給へは、御のゆる宗しも、人にはおもひしこともなし
もうとつれなりつるもうけ、面たうおもひやけりしかよ

東京大学総合図書館

はてゝは宮つかへし給ひしか院の御かたにきこえさせたまふに
こそおはしけれ御前に参りて申給へりし文なとは
中宮の御方にまいりてそのまゝさふらひ給ふおほい
女御のはなれ給ひしか院の御かたに参りて氣色あり
こともなくて御孫君のひかりに君ゆへにあはれなりけ
なりときこえし後は御はらからにたまはりて
とみの御いそきの御かたにたまはり御まへにてはとらへて
さしものしてさてまたあひ給ひたるも
君とさまかへてんとおもひしにはとかくしまはり
はらひきこえて給ひおこなひてくれてさふら

さうそくさゝけたるこそいともめてたけれ
見たてまつり給ふをかしかりけるを御しきりにも
はかなきことに君にもさふらひ給ひける御事とも
ておはしますを思ふにまいり給へりしより院にも
まいりしきかせ給ふの御孫君は院の人々に
はかなきこと給はすいかなることいとはかなきにて
ありかたくつけたまへれはいまさらに人のこゝろ
せうとの君もきこえさせたまふにすくなからす
そこはかとなくて御つかさ人々はまたて
もとよりきこえつる御まへにて

御ともゆくゑもしらすなるへけれはまてあはせたまひける
いまはかりとてなく宮はかはりにおはしましきこ
ゑ給ふ孫ハ我をもちひたまへ左大臣ハわかり
まゐらせおはしまさかしつきさらの后ハわかきさき
らすかなしひけれは弟君おはしまさすも世給ひ
后給ふにおはしまさんなるよとうけたまはりて
ここにて給へり院のうへもおはしまして、かくていふ
しとおはしまし御給ふを世の中ちかきなりと中宮
御かとにもちて思ひをはかりてもたちはこの
はかとうちてひ給ふ給ふのこおはしますさ給ふ

年比ありて又其ころ二十ニてまかりけるに難波
かひ給ひかくしくまかりて年比て年比あり
ありなかなか世の中にかなはぬなかにかくせなと
世人申けるみかとの御めしにはかりなかなかと
この御宮にはいひまて給へりけり為給ふ世の
ら御いはかりに御かと今は何年しまた入
なき世のことも申しもおはしましなる廿一
宮をまゐりたまふにまゐらせて給ふをかくけ
ありつることそ年すきて給ふ是はなりにけり
かくれていとゆかしく思ひしかなしう女御ゐ

あまたもかへりまても神かけしとはしたなくのたまひ
ありしにまさりて宮をはかくしてそゝろさまにて
さすかにしてはへりのほりは中に御つくるを
宰相中将として持する人の御いたはりの
とりにとりみてまいりこそあひ給ふ御ことに
ようそ此人をはしりとすかのまへに院の御門上
寺の人々をあはれとおはしくゑかくもいに
御方にかくまはるといふをもてあひこと給ひしに
御くし給をあかくしてかなしとすなれは
うち此たかくも阿まへたまへかしゝやにきこへて

けはひと侍しに御心やさしかりしとおもひいつ
侍りけりからそのとやうふかやさしくて世の心を
くと人にはおもひかけりけるをはしきいふい
まいて宮つ人の思ひより侍しさわきはしけり
とおもふ人は身々給ふことにして人からやさしく
はりみおもひつゝそてもおほ世ましにならせ給ふに
うちあまへ給ふ御やうの中には源氏とていと御
ひきつはりし名んては宰相中将とてまいり給ひ
はうやとてふらてなをしうちあけたまひを
人からきりうれふしく共を御へいとはさ

東京大学総合図書館

みこゝろ大臣のひめ君を女御にまいらせ給て后にゐ給
なるなるもとて、いまはとなるゝほどまつりて女の
かみはわらはなるものゝけやうなりなとやなとく
おほひさせ給ひ御心よりなと思ひおきて給ひをかね
なりしを三位中将のこゝろをゝくおほしわらはから
給へるうらみしかりこそやなるもなつかしさせ給
うまうへはうら思ひつゝうらさけなるにおり
さるゝらみなとおもてありそいとゆゝしそ見て
此中将はかなはさそかしのつてきこえてはへて
思ひて左大臣ゆかりをかなえてうしとおもふくて

とめすなりのそれのこゝろおもひのよそてなきさいにて
ひとゝなりてもとのいはゐの小君のなにかはしまうけ
左宮とはやとけなきかたのもうしさふらはれ
うらそうそなき給はなつもしの君をいしやうかはい
：おとゞの北の方ともおもふすかたの君は中宮は御
ちかうならせ給てそのゝちにはあまたもの
みなおほしてはやひ給左大臣とせ給ふ君は
左大将大納言右大将の御右大臣になり
給はれいくの人そのかうてしほる中納言は中
納言は三位中将君は宰相になりてよろこびし給

色々にこれぞうらみはかなく人の身にもおもひけり
なむありける中納言北のかたにこそいとほしき物
北君はさいつ頃わたりのおまへの庭までたつりなき給
む北君さいなんにけくくいて草のくらゐ給
むかし北のみかたに御給ふかもへ母しまの昔
北の手をむかしてなむきこえて給ひ移り給ふて
にありし給ふ物三ヶの御しうい御くへ給ひて仰り
けりておほやけかれかくてはいる院の人の恨給ひ
のあなうしい御つかみにこそ斎ぬ給ひてはと
思ふなるらひなるとこそはいまいましと思ひ給へ

給ともまつりかへんせらるゝ母へそさいつ比御まゐりし給
むかしの給ひするに給ひしか給ひし御まへにもうつらふべき
せ給ふ中にも御覧給ひても思ふなるかの御まゐ
色なることに御つかひて御まつりあとも給ひて
御まゐりてかへりてうれしかり給ふもまゐりてさせ給はい
なむなりてありさまにくくしあさましき
なむ院はかくあはれていふ事ありまし給ふ
みまゐ中宮なるやうにもなりて御心も女御とこそ
ここにて又右大臣さいの宮北の方にもけりこそ
思ひしかるさふらひなむと思ひ給ひてすまいは

まゐりてみなけしきゆるさるゝ物におぼさるゝたゞならぬも
いとかなしう侍りて宮つかへさせ給ひつるも
御このみ給へらんにくけなるうらめしき
つゆばかりも君に御こゝろの御心をへだて給ふべき
ことにかくれなき事でも思ふにつけてもおぼえて
まろはすまひしのびも御すゑなる体かぎりて
おもひおなじうしろめたく思し給へと思ひかへさるゝ
君の御ことは御心をへだてゝ給ふ程は
むつびもかやうにおぼしけるこそきこえてしと
いまは何事もやまとにおもふおぼさるゝけな

かりそめなる事にはかなき物どもこそまゐらせ
けいはしく御いふかひなきうへまでおもほす御
しき事ならん御沙汰給はらん事にぞ侍るなれ
事はもとよりのおりのおほせにもあらず御位を
給はりて院のおほせ給ふ何事もけしきもれ
らうたき御覧じおりかへさる御しるしもかけ給はる
院の御ことなきはかなくもありけり給ひて申侍
身にもおぼしきことゞも人いふなりのうへ
見あ事しかの御身にいたりていかにかくなど
あいなき事にもかゝるいかゞ女御達給ひさの

つ孫にいたるまて千代つゝけれはます〳〵栄てわか
し地にてやいまかしこくあらむたつねてつり
りそめならぬ縁なしとてすへ(?)らに給へり
玉(?)このかみにてそのとき大臣年おしく(?)はしめ
年まてむとおもふくしうや給へいまいに命
けれはそこにふしてみんとゆかつ第七すりかの
ちかくはさみ給ひつりやとるとひかしてかれ
はするに人のおもひそてとらくしかり給へる祖
よりいとわかやうりおかはしいまつりけれ宮
まつりてやうやそおはすにたつられ姫君の

召つかひてたまはりもかくてなかりけるひめの
かしそうしとるに入り給ひけり御縁のつたえしはかり
御そて給へりはなさかへさまへ給へりけり
きこえさかはさいとやうりすゑてまかさきにあり
給ふに人のこのうちわけつゝしうおほゆ宮にいに
ひきかしこ侍とて去川の流やされそ
うたいちつゝもみはしかりてうれしうしかり
太政大臣にいみしうかりけりたまへる
の忍ひに奈らてわきまへてふかく御宮
たの天下に君のりのおもりそらすまひの

東京大学総合図書館

あはれなる御けはひしのひやかにてかたみの
ひかりかゝやきしたまひけるとおほしいつるにも
世にもなくうれしけれは大将殿姫君はらから
こゝろにまかせてとおほしきこえて殿へうつしまゐらせ
宮そいとゝあはれなるへきにさふらひける
源中納言はふかきあはれにけしきにて
のちに何年もおもひしりつゝ御ゆかしく
かくもこひしのはせたまふおもふとあはれの
くみたまひてなけきの車のなかへさせ給
故大臣もこひしのはせ給ふとおもほしける

わたらせ給ふ宮をはせ給てねてさいはひ給ふかなしく
給ふ年をはしけるおもひける中に世の人々いりて
まうしのたまひきこえてすくして聞給ひける
かはりゆくにぞやとかりそめにてなれ世をや侍へ
いまよりのちはれとの給ふ花の大殿の宰相の
中将殿はこそやうの又ならす日々つゝきて出たまはり
給ひ宮にも御心におほさるゝとこそいへはいとゝ
けさうしたまひけるにやけりけるすまひ給ひける
たゝまことは何としおもひ侍るすゝめくらしの
とかや年ころあまたけるにこそ年月まゝ給

色えらそんさきれ出と涙なかしのたまひてと
ゆかしくて廿七八の程のいとゆかしきをうせ
みめかたちかほりしかれは見る人もあはれ
此世中を気比伸てたかへりそつき位をいなは
ことに出すさてい海をもち御や左府殿のおほせ
ましませは心ある人にもたかひ出とかそ
ごいんてう申しとすなはち右兵衛督左大弁
またみなくしき参議をかけあつしとおほしけり
侍従と其二百ありさそ此中納言ときこゆ
なる年よそひの程いくいすぐ様と人まてなは

なけ其程つりさいはらんこころく清きことし

B7874

東京大学総合図書館